

特集にあたって

石見 清裕

戦後の冷戦が「雪どけ」を迎えると、それからしばらくの間は「多極」「多極化の時代」という言葉をよく耳にした。フランス・中国・インドや東欧の非同盟国の台頭によって、米ソ両極以外の比重が増した世界の構造を指す用語である。日本や西ドイツの経済復興を含む場合もあった。私が学生だった一九七〇年代まで、「多極」は紙面に躍っていた。

「多極」は multipolarization の訳である。したがって、「極」は pole、柱・軸であり、この場合は中心の意である。「多極」は、三つ以上の中心が並び立っている状態を指す。

それならば、「多元」はどうであろうか。

「多元論」に相当する英語は pluralism である。つまり「多元」は plural なのであって、複数の存在・原理・概念を念頭に置く考え方をいう。とすれば、「多極」と「多元」のいずれであっても、複数のが並立することが大前提である。ところが、そうはいっても両者の意味するところは相違する。

「極」とは本^{もと}であり、根本である。それがないと存立しえ

ない最も大事な要素を指す。一方の「元」も「もと」であり、やはり物事を成り立たせているおおもとをいう。ただし、こちらは「原」に通じ、「極」よりも広く深いイメージを与える。「極」が影響力を及ぼす範囲やつながりの中心であるのに対し、「元」は必ずしも中心を想定せずに、ある範囲がそれを一つの括りと捉え得る共有性の根源をいう。

「多極」と「多元」がともに同じ複数併存の状態を指すのであれば、両者の相違性は、それぞれの「極」が、またはそれぞれの「元」が、相互にどのような関係にあると認識するのか、それを問うのが有効であろう。「多極」はポイントの軸どうしが対立し、拮抗している状態を意識する。それに対して、「多元」は複数の空間や性質が共存している状態を意識させる。両者の違いを際立たせる点は、ここにある。

political pluralism という思想がある。通常は「多元的國家論」と訳す。國家の權力の絶対性を否定し、權力を様々な職能団体に分割させることによって、よりよいと標榜する國家を形成し維持しようとする理論である。これは「一元的國家論」と両極をなす。二〇世紀初頭の欧米諸國で提唱された理論で、背景には、当時の國家權力が著しく巨大化して國民生活にまで干渉するようになった状況があった。失われようとする人間の自由や要求を回復しようとする主張からおこったといえよう。具体的な理論展開は、共同社會（教會・學校・組合など）と國家とを區別すること、それら共同社會の主權

の確立を目指すこと、の二つの段階をとって現れた。この視点から「多元」を考えれば、昨今のわが国の文科省の方針や、なによりも集団的自衛権の憲法解釈という深刻な問題に直面する。

「多元」は、「多極」よりもはるかに意味するところが深い。そこには、いくつもの範囲の相互関係があり、一つの範囲における階層間の構造関係も含まれるのである。

「元」と「極」は、本来は異なる位相の概念といふべきかもしれない。しかしながら、この世界を多極化といひ、多元的といふのであれば、同位相で議論できさうである。そして、「元」が「極」より広義であるならば、「極」は「元」に含まれねばならない。どういうモデルを想定すればよいであろうか。

わかりやすい一例として、「元」に「漢字文化」を設定して括つてみれば、その地理的範囲には中国 (Chinese proper) ・韓半島・日本が含まれ、時代によってはマンチュリアも入るであろう。そして、この範囲内に政治的「極」がいくつも存在するのは、誰でもわかるであろう。もちろん、「元」に別の要素を設定すれば、その範囲や「極」のあり方も自ずと変わってくる。「元」と「極」との関係をこのように捉えられるのであれば、複数の「極」が相互に影響を及ぼし得る限界があるはずであり、さらにそれは複数の「元」の間におい

ても同様である。すなわち、「境界」の論理である。

国際政治学の分野では、歴史上の境界が発生する要因として、次の二つの捉え方をする。一つは「拮抗力 countervailing force」がはたらくケースであり、もう一つは「勢力損失勾配 loss of strength gradient」がはたらくケースである。前者の境界が狭くて線形的であり、そこには内向き・求心的・隔絶的・人工的な性格が見られるのに対して、後者は地帯 zone 的であり、外向き・遠心的・媒介的・自然発生的な性格が見られる。政治地理学では、前者を「バウンダリ boundary」、後者を「フロンティア frontier」と呼んで区別する¹⁾。

こうした理論を念頭に置けば、極と極の間の境界は多くの場合に拮抗力によるバウンダリ的であり、元と元との境界は多くの場合に勢力損失勾配によるフロンティア的であることに気づくであろう。ただし、状況によっては両者が重なるケースもあり、さらにはバウンダリがフロンティアに変わり、逆にフロンティアがバウンダリに変わることもあり得ることは、念頭に置かねばならない。

「多元」の背後には、つねにこの構造が潜んでいる。だから「多元」を議論するのであれば、早かれ遅かれ、いつかはどこかで、こうした問題に直面せざるを得ないであろう。

かつて松田壽男先生は、ユーラシアを遊牧民の生活するステップ地帯、オアシス農耕民の生活する砂漠地帯、稲作農耕

民の生活する湿潤地帯に分類し、相互の関係のあり方から「世界史」を捉えようとした。また栗原朋信先生は、印璽の分析を通じて、漢代の東アジア国際関係を、漢の法と徳と礼に従う内臣、徳と礼に従う外臣、礼のみに従う客臣という三重構造で成り立っているとされた。これらは、いずれも多元が一つの世界を成す、その構造原理を導き出した研究である。

早稲田大学の東洋史学は、こうした学統を受け継いでいる。だから、各個人の意識に程度の差はあるにしろ、何らかの形でアジア史を多元的なものとして捉える傾向にある。本誌の特集は、その学統を踏まえて企画された。

年月は過ぎ去り、研究は大きく進展した。かつての先学たちの築いた大枠の理論をうけて、あらゆる分野で実証研究が進み、今やそれらによる再構築が行われている。従来は見逃がしがちだった海域史に注目が集まり、またヒト・モノ・情報²の移動から各時代のネットワークを捉えようとする試みが行われている。さらに近年では、それらをうけて、一国史の枠を超えた「グローバル・ヒストリー」が盛んに論じられる。そうした風潮は当然ながらあるべき姿であり、われわれも西洋中心史観からの脱却に異を唱えるものではない。ただし、「グローバル・ヒストリー」は論者によって微妙に主張の音色が異なり、いまだ理論が確立されたようには見えない。

本特集は、そうした歴史学界の風潮に対して、早大東洋史

懇話会としては「どのような視点を提供できるのか」を趣旨とする。

各時代の世界を「一つの連動体」として捉えようとする努力は、もちろん必要であろう。しかしながら、全体を捉えるには、それを構成する部分がなくてはならない。また、部分をいくらつなぎ合わせたところで全体にならないのは、確かにそのとおりであろう。しかしながら、そうはいっても、全体を考えるための材料がなくては議論が進まない。そこで、本特集はあえて「多元」を念頭に置くことにする。各執筆者には、それぞれの得意なジャンルで、また現在の問題意識に従って、自由に論じていただいた。それこそ、「多元」の本質だからである。

そもそも本誌編集部がこの特集を企画したのは、昨年度の三月の大会において、韓国・全北大学校人文大学教授の金成奎氏に講演していただき、さらに寄稿を快諾していただいたことが契機となっている。金氏は、一九九一年から七年間にわたって早稲田大学文学研究科に留学し、近藤一成先生のもとで宋代史・宋代対外関係史を専攻された³。当日の講演は高麗と金との国交を分析した考察で、編集会議ではこれを単なる講演録とするのではなく、これに絡めて特集を組めないかと提案された。趣旨は、一国史にとどまらずに複数の国家・地域間の関係からアジア史を考えようとするものである。も

ちろんそこには、歴史の相対化や上述のグローバル・ヒストリーの提唱などが意識された。そこで、この趣旨に基づいて会員諸氏に呼びかけたところ、何名かの方に賛同と投稿の意思をいただいた。金氏以外の論稿は、後漢・高句麗関係、唐・テュルク関係、イルハン朝と元朝の制度比較、チベット・モンゴル関係を考察する内容である。全体として、中国史に限定されず、中国を含めた各地域をアジア史として相対化する形となり、ほぼ編集部が当初企画した意図に沿う内容になったかと思う。実は、当初はもっと多くの論稿で特集を組むつもりであったのだが、入稿期限の関係で断念せざるを得ない方々もいた。

それでも、本特集の「多元」から「一つの全体」を考えるヒントを提供できたとすれば、それは本誌の最大の喜びとするところである。

注

- (1) Robert Gilpin, *War and Change in World Politics*, Cambridge University Press, 1981, pp.56-57, 146-147, 橋本雄「境界」(加藤友康編『歴史学事典』一四「ものつわざ」, 弘文堂, 二〇〇七年, 一四九〜一五〇頁)、石見清裕「中国史における中央と辺境―唐代の内陸境界地帯を例に―」(東北史学会・福島大学史学会・公益財団法人史学会編『史学会125周年リレーシンポジウム2 東北史を開く』, 山川出版社, 二〇一五年, 一三四〜一三六頁)。
- (2) 水島司『グローバル・ヒストリー入門』(山川出版社, 二〇一〇

年)、パミラ・カイル・クロスリー著・佐藤彰一訳『グローバル・ヒストリーとは何か』(岩波書店, 二〇一二年)等。なお羽田正『新しい世界史へ―地球市民のための構想』(岩波書店, 二〇一一年)は、グローバル・ヒストリーがそもそも米英で提唱された考え方で、完全には西洋中心史観から脱却していないとして一線を画す。

(3) その成果は、金成奎『宋代の西北問題と異民族政策』(汲古書院, 二〇〇〇年)を参照されたい。

(本学教授)